

大関を考え横綱を考える 次代を担うのは誰か？
大相撲 9 月場所観戦雑記

<1> 関脇同士で優勝決定戦

結論から言えば、「横綱・大関不在の中で番付通りの結果」と言いたかったのだが、豪栄道がいたのでこう締めくくるわけにもいかない。

そして、千秋楽に東西の関脇同士の優勝決定戦という珍しいものを目にする事が出来た。

優勝決定戦を制した御嶽海の立ち合いにはかなりの迫力を感じた。貴景勝が胸で受け止めたのだが、想像以上の圧力を感じたのだろうか二の手で叩きに入ろうとした。(右画像:日刊スポーツwebより借用)これがすべての終わりで、御嶽海がこの機を逃す筈がない。そのまま土俵際まで運び去ってしまった。



近頃「相手がいやがる(叩きたくなる)相撲を取る」という表現を頻繁に耳にするが、まさにこの一番は超短時間のできごとではあったがその通りの展開となった。

実力もさることながら、ここ一番の勝負強さの上でも御嶽海が上回っていたということだろう。

この取り組みが、毎場所を盛り上げる取り組みになり続けることを願いたい。

<2> 大関と相撲界の活性化

ここで、相撲ファンもマスコミも、相撲協会も冷静に事実を見つめなければならない。

今場所は四大関が在位していたが、前場所関脇に陥落した貴景勝を含めれば5人が話題の人となる。

この5力士のこの先を考えて見ると、下表のようになる。

力士名(地位)	2019年9月場所	2019年11月場所	2020年1月場所
高安(東大関)	休場	カド番(負越せば陥落)	10勝以上で大関復帰
豪栄道(西大関)	10勝5敗	?	?
栃ノ心(東大関)	6勝9敗	(関脇) 10勝以上で大関復帰	?
貴景勝(西関脇)	10勝5敗	(大関)	?

今後もしばらくは、誰かがカド番で、誰かが特例による大関復帰の状態になる。これが、今始まったばかりのことであれば話題にすべきことでもないのだが、これまで何度も続けられてきていることなので問題視している。

「横綱という最高位への通過点の一つ」として上を見上げている力士よりも、「一定の条件さえ保つことが出来れば高い地位の高い給与が約束されている」と見る力士の方が多いとしたらどうだろう。

今回特例で復帰することになった、先日新大関になったばかりの貴景勝や、これからこの地位を目指すことになるであろう御嶽海などがどの区分に入るのかはわからないが、個人個人がどうかという事以上に「大関という地位そのものの資質」を問われることにもなりかねない。

横綱の先行きが心配になってくる一方で、大事なことを見落としてしまうことがないように願いたいものである。真に力のある大関を作り、その中から心技体に優れた人物が横綱の地位に辿り着くわけで、一朝一夕にできるものではない。

大関作りは「星数の数合わせ」、横綱作りは「優勝またはそれに準ずる成績」の議論ばかり。

横綱が二人とも引退してしまい、「番付上でも横綱不在」、大関は「毎場所交替で負け越しか休場」という椿事が起きるまで誰も気がつかないのかもしれない。

<3> 光って見えた力士たち

両関脇（御嶽海と貴景勝）以外の力士で今場所目についたところを羅列してみる。

前半戦の土俵を見ていると、**遠藤**の復活が強く感じられた。低い立ち合い、適度の開きの両足とよく曲がった膝、鋭い前進圧力、素早い前みつ取り、効果的で無理のない投げ等々で中日まで**6勝2敗**。

多くの人に期待を抱かせたが、後半戦は**2勝5敗**で「まだ何かがおかしい」と感じる結果となった。

小結で**8勝7敗**と一点の勝ち越しではあるが、今場所の周囲の環境から見て、来場所の関脇への昇進は難しいだろう。

初日白鵬を破り、「今場所は一皮むけたかも・・・」と思わせた東前頭筆頭の**北勝富士**。二日目から**6連敗**し、もはやこれまでかと思わせたが、何とその後**8連勝**して**9勝6敗**。しかし、星の内容を見ると、自分より下の地位に居る力士には負けていない。着実に力を増してきていることの証であろう。

白鵬が休場せずに**14勝1敗**で優勝していたら、殊勲賞を貰うことが出来たのに残念。

ツラ相撲の北勝富士とは対称的に、後半戦も失速しなかった**朝乃山**は西前頭**2枚目**で**10勝**をあげ、鶴竜からの金星が評価されて殊勲賞を手にした。立ち合いの踏み込みとまわしを取る早さ、腰を移動させる前進相撲が光っており、相手の陣地へ入って動きながら二の手・三の手が繰り出される。巧さと早さが共存し、大物を感じさせる。

西前頭**10枚目**の**明生**は、上位の壁に跳ね返されて再挑戦の場所だった。前場所までの相撲を見ている限り、勝っても負けても相撲のスタイルを変えない。遠藤と同様の「低い腰の構え」に加えて「下がらない相撲」「叩かない相撲」で常に前へ出続ける相撲は、いつの日にか花を咲かせると見ていた。

11日目まで**9勝2敗**で賜杯争いの輪の中にあったが、終盤で星を落として**10勝5敗**。来場所再び上位の壁に挑むことになるが、今度は突き破れそうな気がする。

<4> 時代の動きと人材育成

怪我で幕下まで陥落したが復活した**豊ノ島**は、西前頭**14枚目**で**1勝9敗5休**。

幕尻で**6勝9敗**の**栢煌山**ともども、高知県出身コンビは十両に陥落することになりそうだ。

再び幕内の土俵で見られることを祈念している。

怪我で十両に落ちていた**嘉風**が引退を発表した。先場所の**安美錦**に続き「味のある力士」がまた一人消えることになった。「時代が動いている」という現象のひとつと捉えるべきなのだろうか。

安美錦・嘉風いずれも共通することとして、「現役力士の内から後進指導に力を入れている」という点が上げられる。伊勢ヶ浜部屋では安美錦の指導や助言を受けて奮い立った力士は数多いようだし、嘉風についても、尾車部屋の若手力士が「嘉風関のひとことで力を発揮」している事例が紹介されている。こういう力士が居る部屋は若手の育成が円滑に進んでいることと思う。

以上